人何千人のぶよぶよになった死体が浮かんでいた。それを刑務所の囚人さんが収容作業をして、刑務所の焼却場で全部燃やした。みんな焼かれて、どこの誰かも分からない人たち、野宿の私達、焼却場の煙の流れによって「天国にいったんだね」と、子ども達なりに話したりしていた。市内は火の海、何日も燃え続け、焼け野原になって、お茶碗や瀬戸物までがどろどろに溶けてしまった。広島刑務所から広島駅まですっぽり見渡せた。官舎の人たちも家が立ち直るまで野宿をしていた。

私と一緒にお風呂屋さんに行っていた庶務課長さんの息子、4年生の秀ちゃんは、帰ってくることはなかった。何日目だったか、どうしてもお風呂屋さんの跡を見届けたいと、私にその場所に連れて行って欲しいと秀ちゃんのお父さんに案内を頼まれた。「鶴の湯」とおぼしき所へ着いたが、骨ばかりがいっぱいあって、どれが秀ちゃんのお骨かわからなかった。けれど、お父さんが秀ちゃんにあげた切り出しナイフが見つかったので、その場所にあったお骨を、「これが秀雄に違いない」と思って連れて帰ってきた。その時は悲しく辛かった。近所には、お勤めに出ていたお姉さんもいた。全然無傷で帰ってきたと思っていたが、一週間くらい経つと、吐いたり下痢をしたりして亡くなった。職員の家族で看病に来ていて、被爆はしていないのに、被爆した人と同じ状態になって亡くなった人もいた。

原子爆弾の投下で、広島の街は本当に草木も60年は生えないと言われていたのに、次の年には生えてきた。そのときは嬉しかった。が、見えない恐怖というのが常にあって、私の身体はどんな風に蝕まれていくのか、こんなに五体満足に助けられたから良かったと思ったが、友達のみんなが亡くなって自分たちが生きていると、何時も何時も不安な状態、いつか何か症状が出てくるんじゃないかという 不安は常にあった。

茨城にいた姉や佐賀にいた兄は、8月15日敗戦後、20日過ぎには帰ってきた。家族は複雑な気持ちの中、全員の無事を喜びあった。

核兵器はどこで使われようと人類の滅亡

私達被爆者はそれぞれ違った生活の中で被爆したが、「あの日」以来、生き残って受けた身体の傷も、心の傷も深く、いつまでも苦しみを味わってきたことは同じだと思う。あの時、日本は戦争をしていたからだ。多くの犠牲者を出した。国の責任だ。

アメリカは、世界で初めて、核、原子爆弾を広島に投下。

その威力は、それは大きなものと思っていたが、今の時代の核兵器を使用しての戦争になると、世界のどこで使われようとも人類の滅亡につながる。核の廃絶と、戦争の放棄は絶対に守られなければならない。戦争のない平和な国づくりを追求することは全ての人類の願いである。

戦後の日本の復興は目覚ましく、苦しみを知り尽くした人たちの努力や、多くの先輩の犠牲の上に築き上げられた現在であり、平和である。今の戦争を知らない若者や子どもたちには、折にふれ流されることなく、悲惨な戦争の歴史を伝え、学び、自分たちの手で本当の平和と未来をつかみとってほしいと思う。

被爆者も年々少なくなってきた。私も残り少ない人生を感じるようになった。とにかく元気で楽しいと思える生活ができること、何か社会に貢献できることはと考えると、無力を感じて悩んでしまう。が今必要とされていることへの協力、自分でできることは一つでもやろうと思っている。

祖母の被爆体験を語り継ぐ

祖母（当時26歳）が広島で被爆（被爆2世）
北村　俊典

祖母の8月6日

私の祖母は広島市から北に9キロメートルの緑井にあった今井病院（現在の広島市安佐南区佐東出張所辺）の次男に嫁ぎ、当時夫は軍医として応召中で、お腹のなかには私の母がおりました。

当時を知る人の話によれば、設備が整い、かなりの遠方から来院される方も多い評判の病院であったようで、そのためあの8月6日にも多くの被爆者が助けを求めて来院し（収容者数300人、遺体処理数80人）、その救護活動にあたるなかで祖母とお腹のなかの母は被爆することとなりました。

当時の様子は祖母がつけていた日記からうかがい知ることができます。

「唯一発で広島中の家が殆ど滅茶苦茶につぶれ、中心一帯に大火災が発生し、2、3里四方の家は潰れ、パッと光った